

NIKKEI DESIGN

No Design, No Business

特集1
ビジネスに革新起こす最新素材



特集2 植栽をデザインに
店舗や家具を彩る新しい「緑」

9
2008



日吉屋 / 古都里

「和傘」+「電球」だけでは革新は起きない

和傘の素材と製法を使った照明器具「古都里」が、国内・欧州市場の開拓で成果を上げている。革新の一步を自ら踏み出すことで、ビジネスの輪が広がった。

【竹・和紙】

真竹製の親骨と子骨それぞれ40本と、1枚の和紙で作られるシェード型の照明「古都里」。細く削られた竹のシルエットと和紙のほのかに陰影とが重なり、日本らしい美しさを表現する。「天ろく」を省き、円筒形から円筒形へ開いたことで、照明器具としての可能性も開けた。

真竹を細く削った親骨と子骨を円筒形に組み、色とりどりの和紙を張って軽く仕上げる。和傘の魅力は、和紙がほのかに光を透過し、細い骨がくっきりとシルエットを描く点にある。この豊かな表情を照明器具に転用できないかというアイデアは、かなり以前からあった。

「2005年ころに、和傘に電球を仕込んで、そのまま照明器具として発表した。だれもがきれいだと言ってくれたが、和

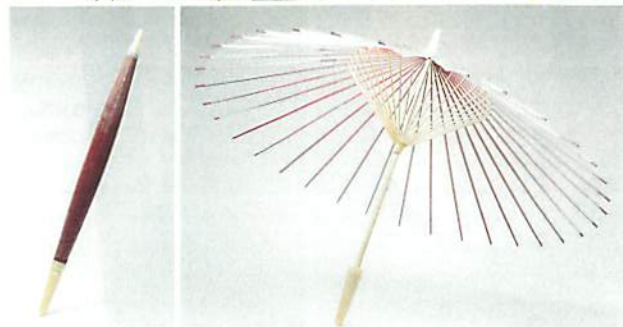
のイメージから抜けきれず、ビジネスとして動くことはなかった」。和傘メーカー日吉屋の西堀耕太郎・代表は、もどかしさを感じていた。

「天ろく」を省いて円筒形に

西堀代表は、和傘の素材や技術を使って照明器具を開発する可能性を捨てきれず、2006年に照明デザイナーの長根寛氏らと「古都里（ことり）」プロジェクト



高級和傘に用いられる「枯椗（ききょう）骨」と呼ばれる組み方を採用した照明の試作「ヨルグ古都里」。アンビエンテなどの国際見本市で出会った仏人デザイナー、ヨルグ・ゲスナー（Joerg Gessner）氏の提案から生まれた。



クルツの島村卓実氏、京漆の佐藤真代松商店、竹細工の三木竹材店といったデザイナーやメーカーを巻き込んで開発され、国内販売が始まった和傘「SINARU」。古都里が和傘本来の魅力を見直すきっかけになった。左ノコンパクトに収納できる点も、古都里の魅力。低コストで輸送できるため、輸出にも向いている。

を発足。長根氏が、和傘の基本構造を残しながら、親骨を頂点で留めるパーツ「天ろく」を省き、全体を円筒形から円筒形のフォルムに替えるよう提案したことが、最大の革新となった。

円筒形になったことで、全体の印象がモダンになり、和洋を問わずさまざまなインテリアとの相性が良くなった。また、天ろくを省いたほか、1枚の和紙をぐるっと張れば完成する簡素なつくりと

なったことで、生産性も向上。さらに、コンパクトに折りたたむための機構は失っていないので、輸送コストは低いままだ。

古都里を見本市で発表すると、ビジネスがたちまち動き出した。オリジナルのほか、コイズミ照明や東急ハンズ向けの製品など、国内市場で2年間に1300台を販売。海外にも約8000ユーロ分を出荷。オーストリアにディストリビューターを確保したほか、欧州のインテリアシ

ョップ9店に売り場を持つに至った。

古都里のユニークな面は、自らのビジネスが好調というだけでなく、さまざまなデザイナーやメーカーを巻き込んで「sinaru」や「ヨルグ古都里」のように展開や進化を遂げている点にある。こうした状況を生んだのは、メーカーである日吉屋がデザイナーと組み、和傘の革新をまず古都里という製品で自ら明示できたからだ。この一步の意味は大きい。